道徳と学級活動におけるシチズンシップ教育の実践

――ピースフルスクールプログラムを通した児童・教員・保護者の変容プロセスの検討――

Citizenship Education in Moral Education and Classroom Activities

――An Examination of the Transformation Processes of Students, Teachers, and Parents Through the Peaceful School Program――

小笹　大道

Hiromichi OZASA

立命館小学校

Ritsumeikan Primary School

Key words:ピースフルスクールプログラム，シチズンシップ教育，M-GTA

目的

日本では，共働き世帯の増加や少子化に伴い，家庭内や異年齢の子ども同士が関わる機会が減少していると考えられる。こうした中，いじめや暴力行為，不登校の児童生徒数はいずれも過去最多となっている（文部科学省，2024）。

オランダでは学校風土の改善を目指してピースフルスクールプログラム（PSP）が開発され，対話や葛藤解決を通じて，自立と共生の力を育む教育が進められている。

私立A小学校は，多様な地域から通う児童が共に学ぶ大規模校である。異年齢活動や自治的活動を重視する一方，児童同士が関係性を築き，支え合う力の育成の重要性を感じている。そこで，個人の成長と大人による支援に加え，仲間同士がつながり，支え合って成長する過程を重視し，児童同士の対話による解決を目指すピア・メディエーションを学校経営の重点目標に位置づけた。そして児童組織と教員組織が共通のモデルで成長することを目指し，PSPの実践を始めている。

本研究ではPSPの実践による児童・教員・保護者の変容プロセスを仮説生成することを目的とする。

方法

協力者：X年度にPSPを実施した小学校1・2年生の担任教員8名。

データ収集方法：各協力者に対して半構造化インタビューを個別に実施した。所要時間は1人あたり約25～35分とし，同意を得て録音した後，逐語録を作成した。

分析方法：得られた逐語録を，修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）（木下，2003）を用いて分析した。補助的に，介入前後の回顧的な数値評定も実施した。

手続き：A小学校管理職ならびに各協力者に対して研究目的，方法，個人情報の取り扱い，倫理的配慮について説明し，研究内容を十分に理解した上で，研究参加について本人から同意を得た。

結果

M-GTA分析では，分析テーマを「PSPの実施者が感じる児童・教職員・保護者それぞれの変容プロセス」，分析焦点者を「PSPを通してより良い学校を創りたい実践者」とした。結果，4つのカテゴリー，9つのサブカテゴリー，24の概念が生成された。カテゴリーは，【①PSPの教育的意義】【②三者の変容】【③相乗効果】【④方向性】であった。

数値評定法では，PSP実施前後の評定値について，正確二項検定による符号検定を行った。その結果，児童の評定は実施前の平均26.0点から実施後56.4点へ上昇し，有意差が認められた（$n = 7$, $p = .016$）。教員は50.9点から69.4点，保護者は38.1点から53.4点へ上昇したが，Holm法による多重比較補正後，両者に有意差は認められず，児童の評定のみ有意差が認められた（調整済み$p = .047$）。

考察

M-GTA分析の結果から，PSPの実践を通して内容理解を深めた教員は，授業づくりにおける自己開示やリフレクションを通して，教員間のピア・メディエーションを促進していたと考えられる。また，児童同士や児童と教員の間に共通言語が形成されたことで，相互理解が深まり，日常生活でも対話を通じて課題解決を図る姿が見られた。さらに，学校経営方針とPSPの方向性が整合していたことが，教員と児童の主体的な学びを促した可能性がある。このことは教育プログラムと組織マネジメントを連動させた学校経営の一事例として示唆的である。

今後は，保護者への働きかけを充実させ，当事者意識を醸成する方策を検討する必要がある。また，中・高学年への縦断的な調査を通して，発達段階に応じたカリキュラムの系統性を検討したい。さらに，児童や保護者へのインタビュー調査を実施し，複数の立場から変容プロセスを捉えることで，PSPが学校全体に及ぼす影響を多角的に検討したい。